

## 教育長室からのお知らせ No. 71(令和 3 年 6 月)

教育長 田中 康寛



6 月になりました。例年より早いペースで各地域の梅雨入りが発表されています。曇りや雨の天気が続きますが、紫陽花が色づいていく様子や雨上がりに見える虹など、この季節だからこそその楽しみや映える景色を見つきたいものです。

じめじめとした日が続く梅雨時の学校生活では、いつも以上に子どもの安全安心に配慮することが必要です。湿気で滑りやすくなっている廊下や階段は怪我のもとですので、教室移動や休み時間に事故が起こらないように努めてまいります。学校によっては、梅雨の時期に合わせてミニ読書週間を設けるなど、児童生徒会による活動に力を入れているところもあります。コロナ禍の中、今までのようにできないもどかしさがありますが、学校全体では難しくても、学級単位・学年単位で子どもたちが楽しめるような取組を工夫してまいります。

次に、学校における働き方改革についてです。OECD 国際教員指導環境調査(TALIS)2018の結果では、日本の小中学校教員の1週間当たりの仕事時間は、調査への参加国中で最長となっています。学校における働き方改革の目的は、教職員の心身の健康を守ること、研鑽や授業準備等の時間を確保し授業力向上を図ることなどです。本市の状況を見てみると、市川市公立学校の教諭の1か月当たりの超過勤務時間が80時間を超えた割合は、令和元年度の6%から令和2年度は3%に減少しています。また、令和2年度に市立園・学校の教職員を対象に行ったアンケートでは、「子どもとじっくり向き合うことができていると思う」と回答した割合は、すべての学校種において令和元年度の結果を上回っています(幼稚園:91%→98%、小学校:70%→75%、中学校:63%→66%、義務教育学校:53%→63%、特別支援学校:85%→97%)。With コロナの状況となった令和2年度の学校運営にあたっては、思い切った行事の精選や部活動の見直し、カリキュラム・マネジメントを生かした授業改善等を行った園・学校もありました。各園・学校での取組が持続可能なものとなるよう、教育委員会では各学校に寄り添い、支援してまいります。

先日、厚生労働省と文部科学省とによるプロジェクトチームにより、本来大人が担うべき家族の介護や世話を担う子ども「ヤングケアラー」の支援策が取りまとめられました。「ヤングケアラー」は自身に自覚がない場合も多く、表面化しにくい構造のため、早期のうちに発見し把握することが重要です。また、年々増えているいじめや不登校への対応の充実も喫緊の課題となっています。子どもを取り巻く環境が多様化・複雑化している中、各学校においてはこれらの課題に対応していくため、教職員はもちろんのこと、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門職の方を交えた組織的で機能的な生徒指導体制と教育相談体制の構築に努めてまいります。保護者や地域の方々におかれましても、共に子どもたちを見守ってくださいますようご協力をお願いいたします。

ちょうど今年の6月、3か月の休園・休校期間を経て、段階的に教育活動を再開しました。子どもたちの声が園・学校に戻って来た時、どのように感じられたでしょうか。言うまでもなく、子どもあってこそ園・学校です。未だ予断を許さない状況ですが、子どもたちの笑顔のために共に力を尽くしてまいりましょう。